

2025年12月14日 待降節第3主日礼拝メッセージ

「おめでとう、恵まれた方」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 1章 26-38、57-66 節

「待降節」(アドベント)も 3 週目に入り、いよいよ来週の日曜日がクリスマス礼拝です。とはいっても、保育園などでは曜日の関係上、土曜日に保護者にも参加していただくなりクリスマス礼拝をすることが多い、12 月に入ってからは毎週のようにどこかの保育園で、クリスマス礼拝が行われています。その中では、子どもたちが、「降誕劇(ページェント)」と呼ばれるイエス・キリストの誕生物語の劇を演じてくれます。小さな子どもたちが、誇らしそうに衣装を身に着けて、一生懸命に賛美歌を歌ったりしている様子は、見ていてとても可愛らしいものですし、保護者にしてみると年々の成長も実感できて、感動も一入(ひとしお)なのだろうと思います。

保育園に通っている子どもたちの目線で見てみると、自分の家族やお友達の家族に自分よりも小さな弟や妹がいることは珍しくありませんし、保育園には0歳の乳児さんも毎日登園して来ています。そして、お腹の大きな妊娠中の女性を見かけることも日常的です。ですから、そのような子どもたちが演じるページェントは、「もうすぐ赤ちゃんイエス様が生まれるんだって」から始まり、「かわいい赤ちゃんイエス様が生まれました。嬉しいね」で終わるという、始めから終わりまでのどかで温かい雰囲気に包まれています。

もちろん、途中で剣を持った怖いローマ兵が出てきたり、大きなお腹を抱えたマリアがナザレからベツレヘムまでの遠い道のりをヨセフと一緒に旅したり、ようやく到着したベツレヘムでは泊る所を探しても、どこの宿屋もお部屋が満員で入れてもらえず、空いていた馬小屋に通されたりなど、困難や危険を連想させる場面もあるわけですが、それらも可愛らしい子どもたちが演じると、それらはとっても軽快に、愛嬌に満ちた、ほほえましい場面として演じられていくわけです。そのようなページェントはページェントとして、クリスマスのお楽しみの一つ、子どもたちの思い出に残る大切な経験として、これからも大切にしていきたいと思います。その上で、私たちは今から約 2000 年前に、実際にこの地上で起きたことは、一体どのようなことだったのか。聖書が今日を生きている私たちに伝えているメッセージは、何

なのか、ということに、改めて耳を傾けてみたいと思います。ページェントを演じている子どもたちが受け止めているように、「赤ちゃんが生まれて嬉しいね。かわいいね」ということが、クリスマスの物語なのでしょうか。どうでしょうか。

さて、今回の聖書のお話は、おとめマリアに天使によって妊娠が告げられる、いわゆる「受胎告知」と呼ばれる場面でした。日本語では「おとめ」と訳され、「処女」という漢字が当てられることもありますが、もともとのギリシャ語「パルセノス」は結婚年齢の時期の女性を表わしている言葉でした。当時の女性は今でいう中学生くらい、14歳や15歳頃には、結婚していたと考えられています。人々の平均寿命自体が30歳代や40代という時代ですから、女の子たちも出産可能な年齢になると、早く結婚し、そして出産していったのだろうと思われます。とはいえ、現代の感覚からすると、まだまだ早過ぎる。それこそ自分自身の「性と生殖に関する健康と権利(リプロダクティブ・ヘルス&ライツ)」というものについて、ほとんど考えられていない年齢だったのではないかと思います。

マリアにはヨセフと言う名の^{いいなづけ}許嫁、婚約者がいましたが、そのお腹の子はヨセフの子ではありませんでした。「マタイによる福音書」1章18節には、「マリアはヨセフと婚約していたが、一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった」と記されています。これらのことから分かるのは、マリアは婚約中にヨセフ以外の子を妊娠してしまったということです。歴史的に見た時、そのようなことは、世界中のあちこちで、昔から、そして今も起こり続けていることが分かります。

「申命記」22章には、聖書協会共同訳ではわざわざ「姦淫について」という小見出しまで付けられて、様々な場面が想定され、律法の上で何が合法で違法か、何が罪で、何が罪でないかが記されています。例えば「ある男が夫のいる女、つまり既婚者の女性と寝たら二人とも死罪」(22)、また「婚約中の処女の娘が、婚約者以外の男と町の中で寝たら、二人とも死罪」(23-24)。しかし「それが町の外の野で襲われたのであれば、娘が助けを呼んでも来てもらうことの出来ない環境であり、不可抗力に基づく行為として、娘を襲った男性だけが死罪」(25-27)、さらには「婚約していない処女の娘を捕まえて寝ても、それは姦淫にはならない。娘の父親に代金を支払って、自分の妻とすればよい」(28-29,出エジプト22:15-16)などと定められていました。これだけ読んでも、当時の古代ユダヤ社

会が、いかに男性中心の家父長制社会で、女性については自身の命についても身体についても、そして「性と生殖」に関しても、権利など全く考えられていなかったということが分かります。

一方では、法律は法律として存在しつつも、それとは異なった現実もありました。例えば「ヨハネによる福音書」8章には、「姦淫の現場で捕らえられた女性」がイエス様の前に連れて来られるお話があります(8:1-11)。律法学者たちやファリサイ派の人々は、イエス様を試すべく、先の律法に基づいて、この女性を石で打ち殺すべきかとイエス様に迫ったというお話です。しかし、考えてみると、町の中で「姦淫の現場で捕らえられた」と言わなながら、何故、男性は不在で女性だけなのでしょうか。相手の男性は発見されて逮捕される寸前に逃げてしまったのでしょうか。それとも初めから現場に残されていた女性だけが発見されたのでしょうか。このお話からも、当時の社会の中で、女性の方が圧倒的に不利で、弱い立場に置かれ、切り捨てられ、また見捨てられることが多かったということが分かります。

現代でもそうですが、性暴力は周囲から隠された見えない所で振るわれることが多く、また性暴力の被害に遭った人も、それを公にすることで更なる被害(セカンド・レイプ⁹)を受けることも少なくありません。そのために性暴力の発生件数として明らかになっている数字よりも、実際には何倍も多くの性暴力が振るわれていると考えられています。その上、古代ユダヤ社会では、女性の方も、抵抗しなかった、逃げ出さなかった、助けを求めなかった、ということで、貞節を守れなかったことは罪として死罪と定められていましたから、ますます言い出すことが出来なかったのだろうと思います。にも拘らず、女性は妊娠してしまうことがあります。自分に暴力を振るった相手は、どこの誰かも分からず、どこに去了かも知らない。けれども自分のお腹の中には新しい命が、確かに生きている……。そのような苦しい現実、それこそ悪夢のような事実に、苦しめられてきた女性たちは、いつの時代でも、どこの地域にも、数え切れないくらいにおられるのではないかと思います。

そしてマリアもそのような女性の一人だったのではないかでしょうか。ある日、マリアの所に見知らぬ一人の男がやって来て言いました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」(ルカ 1:27-28)……。「天使」というのは、背中に翼が生えていて、鳥のように空から飛んでやって来るような姿で、絵に描かれたり

することが多いかと思いますが、元の意味は「天からのみ使い」「神の意志を伝えるお使いの人」ですから、もちろん翼なんて生えていない単なる人だったのでしょうか。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」というのも、何とも大層な言葉に聞こえますが、「ご機嫌よう。元気ですか」というような当時の日常的な挨拶言葉でした。ですからマリアはその言葉にひどく戸惑ったというよりも、いきなり見知らぬ男が自分の所にやって来て、声をかけてきたことに「戸惑った」。そして「なぜ私にこんな挨拶をしてくるのか」と訝いぶかしんだのだと思います(29)。なぜなら、「自分はレイプ、性暴力の被害者とは言え、それが公になつたら姦淫罪で処刑されてしまうから。とにかく目立たないように、ひっそりとしていたい」という思いがあったのでしょうか。

しかし、天使、神の使いは言いました。「恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と呼ばれる」(30-32)。マリアも続けて答えました。「どうして、そんなことがありえましょうか。私は男の人を知りませんのに」(34)……。もしかしたら、マリアはまだ自分が妊娠していることの確信が無かったかもしれませんし、できれば妊娠していないで欲しかった。見知らぬ男に、いきなり「あなたは出産するだろう」と言わされたので、慌てて否定した言葉だったかもしれません。ですが、天使は続けました。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを覆う」(35)。つまり、あなたは神の保護の中にある。違う言葉で言い換えれば、「あなたは決して汚れていない」ということです。

さらに「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」(35)とも言われました。当時のローマ帝国支配の植民地世界において「神の子」とはすなわちローマ皇帝のことでした。もちろんローマ皇帝も人間として、人間の父と母から生まれていましたが、ギリシャ・ローマの伝記では「神と人との間の子が偉大な英雄になった」と語られることが多くありました。ですから、誕生が予告されたイエス様についても、同じように「通常の結婚、婚約者との間の子どもではなかったとしても、その子は神からの恵みを受けた聖なる子、神の子である」という語り直し、新たなる意味づけがなされたということです。そしてマリアは天使の言葉を受け入れ、「お言葉どおり、この身になりますように」と答えました。

その後、マリアは、天使が伝えた通り、親戚のエリサベトの所を訪ね、およそ3か月間の間滞在し、お互いの妊娠について語り合い、励まし合い、支え合いました（1:39-56）。そして57節以降になりますが、エリサベトは洗礼者ヨハネとなる男の子を出産しました。すると、近所の人々や親類がすぐに集まって来て、喜び合い、名前を付けるのにも大騒ぎだったと記されています（57-66）。さて、このエリサベトの出産・洗礼者ヨハネの誕生の記事を読みながら、改めてマリアの出産・イエス様の誕生の場面を、思い返してみると、どうでしょうか。どこがどう違っているかが、よく分かるのではないかと思います。エリサベトは「不妊の女」と冷笑されつつも、それでもヨハネの誕生は親族一同の待望の子どもでした。一方でマリアは、その妊娠から出産までずっと「罪の女」でした。住んでいたナザレから、夫ヨセフの故郷であるベツレヘムまで来たにも拘わらず、親戚や知人の家にはどこにも入れてもらえませんでした。当時の人々の常識では「たとえ見知らぬ旅人でも、泊めてあげて、もてなしなさい」というのが、通常でしたが、それにも拘らず、故郷では皆が旧知のヨセフと、その妻のマリアに、しかも出産間際の妊婦に、敷居をまたがせることを許さなかったのは、やはりマリアとそのお腹の子が、汚れた罪の女とその子どもとして、差別されていたということの表れだったのだろうと思います。

そしてヨセフとマリアは、宿屋の中にではなく、家畜小屋の片隅に腰を落ち着け、そこでマリアは出産し、飼い葉桶の中に生まれたばかりの赤ちゃんを寝かせました。その後、そこにやって来たのは、当時の社会の中で汚れている罪人と見なされていた羊飼いたちであり、また外国から来た異教徒の怪しい占い師たちでした。つまり、ベツレヘムの町の人たち、ヨセフのことを昔から知っている友人や知人たち、いわゆる普通の、一般の人たちはそこに姿を現すことはありませんでした。そのような洗礼者ヨハネとイエス様の対比的な描かれ方を通して、私たちはクリスマスというものが、どこの誰に向かって告げられたものだったのか、与えられたものだったのかを、窺い知ることができます。

さて、おとめマリアは、2000年前の古代イスラエルだけに限らず、いつの時代にも、世界中のあちこちにいるのではないかでしょうか。戦争の混乱の続く中で、また震災などの災害の続く中で、経済的な困窮や社会的な混乱の続く中で、多くの「女性」たちが望まない暴力を身に振るわれ、その被害を受け、そして望まない妊

妊娠どころか、周囲からの無理解と更なる差別の標的にされることが、まだ無くなっています。そして、そのような「女性」たちの命と人権、尊厳を守るために懸命な活動をされている方々もおられます。クリスマスに人となった神は、そのようなところにこそ共にいて働かれておられるのだと思います。

希望が見い出せないような真っ暗闇の中において、恐怖と不安でいっぱいになっている中に、神の使いはやってきます。ちっとも嬉しくない、決してありがたくない状況の中にこそ、「おめでとう。恵まれた方。神はあなたと共におられる」「いと高き方の力があなたを覆う」と告げてきます……。だから、きっと大丈夫。「神様のみ心が、お言葉通りのこの身になりますように」と答えつつ、私たちもまた自分の隣にいる小さなマリアに「大丈夫ですか？ 私も一緒に行きますよ」と声をかけられる天使となりたいと思います。

闇を照らすろうそくの火が、一本からもう一本へとその灯を分けていくように、神が共におられて、共に働かれていることを、私たちは確かに証していきます。来週にはアドベント・クランツの全てのろうそくに火が灯されるクリスマスを迎えます。